

メキシコ・アグアスカリエンテス日本人学校での現地素材を用いた授業モデルの開発を通して

前アグアスカリエンテス日本人学校 教諭

高知県香南市立夜須小学校 教諭 井上 雄二

キーワード：メキシコ・アグアスカリエンテス、現地素材、国際理解教育

1 はじめに

アグアスカリエンテスはメキシコの中央部に位置し、90万人以上の人々が住み、歴史的建造物を含む街並みが美しい穏やかな街である。市内には多くの日系企業が進出をし、多くの日本人が生活をしている。そのなかに、小学部1年生から中学部3年生までの約100名の子どもたちが仲良く学び合っているアグアスカリエンテス日本人学校がある。

本レポートでは、校内で「国際性豊かで、『自主性』、『発信する力』（表現力・活用力）をもった子どもの育成～現地素材を用いた授業モデルの開発を通して～」を研究主題・副題にして取り組んだ実践の一例を紹介したい。



アグアスカリエンテスの街並み

2 現地素材を用いた授業づくり

(1) 現地素材の設定

私は、日本人学校で勤務させていただいた3年間、アグアスカリエンテスにおける地域学習の開発と実践を自己の研究テーマとし調査研究を進めてきた。特に、現地の教育について調査を行い、現地教材を作成し活用することで、国際理解教育の推進につなげたいと考えた。基礎研究としては、アグアスカリエンテスの強みについてや、メキシコの教育について学ぶとともに、現地公立校や私立校への現場調査を行い、現地素材の教材化を進めてきた。

3年目、校内の研究と重ねて、研究のねらいが達成できるように現地の教育をテーマに授業実践を行うこととした。授業実践を行うにあたり、児童に、「メキシコの教育の現状を、どのような現地素材を用いて伝えていけばよいのか」「どのように授業を組み立てたら、この国の誇りと未来についての理解につなげられるのか」など、授業づくりをするうえで熟考しなくてはならないことが多々あったが、授業のなかで児童の様子や変容を見取り、現地素材を用いた授業の意義を確認していきたいと考え、取り組みを進めた。

(2) メキシコの教育について（概要）

教育の内容	メキシコ	日本
学校制度	3・6・3・3・4制	6・3・3・4制
義務教育期間	3歳～18歳（幼稚園～高校）	6歳～15歳（小学校～中学校）
学校年度	8月～翌年7月（年度によって変化あり）	4月～翌年3月
学期制	基礎教育（幼稚園・小学校・中学校）に関しては学期制を取らず、高校に関しては通常は2学期制をとっている。	日本の小学校、中学校、高等学校などは3学期制を採用しているのが一般的だが、2学期制を採用している地域や学校も少なくない。

教育の内容	メキシコ	日本
就学年齢基準日	学校年度開始までに満3歳になった者が、義務教育の第1学年（幼稚園年少相当）に入学する。年齢については前後4ヶ月の猶予が認められており、2歳8ヶ月から就学できる。	満6歳の誕生日以後の最初の4月1日から9年間（満15歳に達した日以後の最初の3月31日まで）が該当する。
学級児童生徒定数	基準はない。	40人（小1は35人）
義務教育段階の学費	授業料・教科書代については、公立は無料。	授業料・教科書代については、公立は無料。
中等学校入学率 （就学年齢者のみ）	67.88%（2012年）	99.14%（2012年）
大学・短大進学率	28.99%（2012年）	61.46%（2012年）
学校給食	給食制度なし。 お弁当か、学校にある軽食店で食事をとるのが一般的。	義務教育諸学校の設置者は、当該義務教育諸学校において学校給食が実施されるように努めなければならないとされている。（学校給食法第4条）

※参考資料：メキシコ教育省（SECRETARIA DE EDUCACION PUBLICA）HP・外務省HP

(3) 現地素材を用いた授業実践

平成29年10月に第5学年国語科「グラフや表を用いて書こう」の単元で、「グラフや表を用いて、説得力のあるメキシコに関わる意見文を書こう」という課題設定をし、授業実践に取り組んだ。

主目的としては、国語科のねらいである「目的や意図に応じて収集した事柄を、全体を見通して整理するとともに、引用したり図表やグラフを用いたりする書き方を工夫して、自分の考えが伝わるように書くことができる」とした。また副目的として、「現地素材を用いた資料を活用し、それに関わる意見文を書くとともに、相手意識をもたせることで、よりメキシコに興味をもち、説得力のある文章を書くことができる」と設定した。

本国語教材が取り扱っている「社会の暮らしやすさ」について考えることは、社会の状況に対して目が向き始めているこの時期の児童にとって意味のある問いである。ここでは、社会生活に関わるいくつかの資料を掲示し、そのうちの一つ、日本のごみの総排出量の推移のグラフを根拠にして、自分の考えを書きまとめた文章例を掲載している。メキシコでもごみ問題は大きな課題であることを学習したり、ごみ最終処分場の見学をしたりしているので、児童は身近なこととして捉えることができると考えた。

さらに、現地素材の視点で、メキシコの年齢別人口や小中学校の就学率等の資料を用いた。素材としては、自分の生活とは直接関係がないことから、客観的に読み取る内容になってしまうことも予想されたが、生活しているメキシコの現状を捉え理解を深めることは、他国や自国、自身と正しく向き合うための素地になると考えた。

児童に事前に行った国際理解教育に関わるアンケートでは、「メキシコやアグアスカリエンテスの人・もの・ことを用いた授業では、メキシコやアグアスカリエンテスについて進んで考えたり、考えたことを友だちに伝えたりすることができていますか」「自ら進んでメキシコの文化を分かろうとしていますか」という設問に対して、「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」と回答した児童がクラスの4分の1いる結果となった。結果を受けて、前述したように研究内容と重ね、授業のなかで現地素材を用いることの意味や効果を、児童の実態を捉えながら検証することとした。

学習の流れとしては、①単元の学習課題を設定し、学習計画を立てる、②教科書の例文を通して、文章構成を理解するとともに、資料の効果的な活用の仕方をつかむ、③メキシコに関わる資料「年齢別人口」「小中学校就学率推移」から読み取れる事実とそれについての自分の考えをまとめる、④説得力のある意見文になるための文

章構成を考える、⑤考えの裏付けになる資料を用いて意見文を書く（再構成も含む）、⑥書いた意見文を読み合い、意見や感想を交流する（最終校正）、⑦意見文をメキシコ内の他校の日本人児童に発信する（学習交流）とした。

現地素材活用のポイントとしては、メキシコの実情に関わる意見文を書くための意欲付けを図るために、メキシコの方々とのこれまでの触れ合いを振り返って、「メキシコのよさ」をKJ法^{注1}を用いてまとめたり、自作教材「メキシコの教育」を活用したりした。また、自分たちが書いた意見文を、メキシコで共に過ごす他校（グアナファト補習授業校5年生）の日本人児童に発信することを1時間目の学習計画を立てる段階で設定することで、単元通して相手意識をもち学習意欲を高めるための工夫をした。さらには、他校児童とそれぞれの学びを共有することで、発信することの楽しさを実感させるとともに、共にメキシコで暮らす同世代とつながり、お互い高め合って欲しいと願った。

また、資料を用いて、読み手を説得する力を身に付けさせることも重点に置いて取り組みを進めた。既習の「考えを明確にして話し合い、提案する文章を書こう、明日をつくるわたしたち」では、実際にアンケートをとり、その結果を受けて提案書を書いた班が、より説得力があったことを想起させた。さらには、資料解釈を慎重に行わせ、そのデータから何を読み取るのか、何を意味付けることができるのか等、事実と考えを分けながら、十分に検討させた。より意見に説得力をもたせるために、グループ協議を用いて複数人の考えを共有させることで、安心して意見文を書けるようにもした。

そして、意見文を發表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うことを大切にした。助言することができるために、グラフや表を説明したり、引用して説明したりする基本的技術を理解しておく必要があるので、前単元等の学習で習得させるとともに、視覚教材（説明名人の技）を活用した。また、意見文については、編集グループの協議のもと、最終校正を行い、互いに表現力を高めることを自主的に行わせた。

これらの重点指導や現地素材を用いた「書くこと」の学習を通して、楽しみながら自信をもって学習に取り組めるようにするとともに、さらに学ぶ意欲、「自主性」「発信する力」を高めていくことをめざして授業実践した。

注1 川喜田二郎氏が考案した発想法（データをカード化してグループ分け、整序し解決していく方法）

(4) 授業後の考察

今回の実践を通して、現地素材を意図的に用いて授業を行うことで、児童の学ぶ意欲は高まり、自主的に思考し、表現する姿が見られた。また、メキシコやアグアスカリエンテスの「人・もの・こと」を活用することで、「ここだから学べる」という付加価値が、児童の学ぶ力を高めたように思う。そのなかで、日本とメキシコの違いに気付き、その違いを認め受け入れることができた。

そして自分たちが書いた意見文を、メキシコで共に過ごす他校の日本人児童に発信し、その感想をいただくことで、一人ひとりの自信にもつながった。さらには、他校児童よりメキシコに関わる違う視点での意見文をいただき意見交流することで、これまで以上にメキシコを知り興味をもつことができた。児童の意欲や向上心に天井はなく、もっと知りたい、学びたいと思う気持ちをもつことができたことは大きな成果である。学習の目的意識や相手意識をもたせることで、児童は自主的・主体的に学ぶことができることを改めて感じることもできた。

授業実践後のアンケートでは、現地理解に関わる肯定的評価が増え、現地素材を用いた授業づくりをするもののよさを実感することとなった。

3 おわりに

「メキシコの小中学校の就学率は、年々増えてきています。これは、メキシコの人たちが子どもたちのことを考え、様々な取り組みをしてきた結果だと思っています。子どもたちを大切にするメキシコの未来は、もっとよい方向に進んでいくと思います」

これは、小学部5年生のある児童が意見文のまとめに書いた文章である。他の児童も前向きな意見を書いて、

それを他校へ発信し、お互いの考えを共有することができた。私自身が、メキシコ・アグアスカリエンテスの教育について教材開発及び授業実践するにあたり、一番留意したのは、この国に対して児童がマイナスな受け取り方をしないようにすることであった。そのためには、普段からの授業づくりはもちろん、児童との信頼関係を築き、指導者側が何を伝えたいのか、その思いを感じることでできる学習集団になることが大切であった。テーマ設定の理由は、児童の表現力や活用力をさらに高めることと、国際理解教育の推進である。国際理解をする際に、その国の現状を受け止め、認め、前向きで建設的な意見が出せるような手立てを組むことを心掛けたので、今回の現地素材を用いた授業が、児童にとって日本やメキシコの文化や教育を理解し、違いを認めることができきっかけになったことが大変うれしかった。

この全教員で取り組んだ研究により、児童生徒は現地素材を用いた授業を行うことで、より国際性豊かになり、意欲をもって自分の考えや思いを表現していくことができた。学校全体で行った本研究は、次へとつなげていきたいと思い、現地素材を用いた授業モデル「アグアスモデル」として1冊の冊子にまとめられた。

私自身、メキシコ・アグアスカリエンテスの教育について学ぶことは、日本の教育を振り返るきっかけにもなり、日本でも教育改革が進んでいるなかで、メキシコの教育改革と比較することで、より深い理解につながっていった。さらに、メキシコの教育制度、教育事情、児童生徒の生活環境等の実情を把握することができたとともに、国際理解教育、国際交流活動等の推進、学校や地域の特色を生かした教育活動を充実させていくことができた。

アグアスカリエンテス日本人学校で教育実践できたことは大変貴重な経験であったし、大きな学びをさせていただいた。今度は、現任校で地域にある素材を用いた授業づくりを行い、児童の豊かな心を育みながら、学んだことや学校や地域のよさを世界に発信していきたいと考えている。

今まで、支えていただいた方々に感謝しながら、今後も、国際理解教育を推進していきたい。